

## 第43回新日美展 上位受賞作品 講評

外部審査員  
美術評論家

中野中先生

文部科学大臣賞 四方 公子

「記憶の中の旅物語」

水彩 F一〇〇号

参議院議長賞 土屋 政夫

「刻橋」

アクリル S一〇〇号

不思議な景である。その不可解に心が揺さぶられる。雲一つない青空の下に広がる大地に登場するそれぞれは、互いの相関性を持たず、にもかかわらず総体として何やら不穏な気配があり、それは不安な思いを喚起する。明るい景の中の陰りは、イマの時代状況が抱えている不安なのだ。

東京都知事賞 永野 信

「プロバンスの白い家」

油彩 F八〇号

曾遊の地への思い出シリーズを続ける。独自のマットなマチエールが醸し出すテクスチャー(肌感)に、十分に咀嚼しやくした味合いがある。舞台はアンコールワットで、その文化遺産を象徴づける仏像や遺構を再構成し、奥行きある時空間を演出した。その時空間は画家の関(けみ)してきた人生の時空間でもあるのだ。

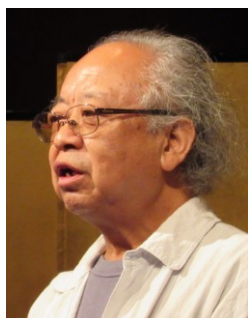
やわらかな夕明かりのなかに静かに佇む白い家。大きな空の下、自然に包まれた一軒の家だが、寂しさは少しもなく、むしろ豊かな刻の流れを感じさせ、人影も見えない穏やかな日々を思わせる。そこに数世代に亘って生活を続けているであろう、風土性さえ漂わせている。

衆議院議長賞 小林 志津子

「精魂込めて」

油彩 F一〇〇号

大きな画面から闘魂が溢れ出る。瓦解した塊を片付けるべく格闘している。その姿にフォーカスして、喰いしばる顔や力をこめる腕に全ての象徴を表現した。繰り返される自然災害の惨禍に、負けてたまるかと精魂こめて闘う姿に、思わず「がんばれ」と声をかけたくなる。目線を低くして迫力とリアリティをうんだ。



中野中先生

外部審査員

元東京造形大学教授

芳賀 文治 先生

工芸部門について

一言で工芸(品)について述べることは大変難しい時代になったと感じています。工芸(品)の原点は、日常生活を快適に送るために手で制作された生活用具等を指している、使い易く、また芸術的な意匠を施し機能性と芸術性を融合させたものと考えます。

時代が進み社会の変化と共に生活用具等は大量生産が可能となり、機能よりも美的なものをねらいとして技巧を凝らして鑑賞に堪えうる作品も多く見られるようになってきたと同時に多様な素材、多様な表現が多くなり、工芸(品)部門、絵画部門、彫刻(塑)部門の境界も明確でなく、その解釈や評価も人により異なる時代になつていると感じています。

この度の出品作品も多様な素材と表現方法が見られました。私は工芸の制作には表現のための技巧の習熟が非常に重要であると考えています。緻密なまでの技巧の習熟が機能性、芸術性を高め、観る人に感動を与えるものと考えます。

大きな三点の観点から、感想を述べさせていただきます。

- ① 創作意図と素材の適合性
- ② 用と美の融合性
- ③ 制作意図を表現する技巧

東京都議会議長賞 湯澤朱美

「希望と慈愛と信仰」

中世の教会に多く見られるステンドグラスを想像させる三角柱の照明器具です。深い信仰の精神性を表現した温もりのある色調と天使のような人物がよい。この照明のもので、くつろいだ生活は心のやすらぎと潤い、明日への力が湧いてくるように思われます。現代の人間生活は夜が長くなり、照明の果たす精神的役割は大きい。照明に関わる作品の連作を期待したい。

新日美大賞 森本盾二

割梅鉢「先祖様より」

金属で制作された花紋の割梅鉢(「先祖様」)が流木に乗って向こうの岸からこちらの河岸着いたのであるうか、お盆の頃や彼岸の頃を思い出される作品です。金属は、一般的に堅い、冷たいという印象がありますが、作者の先祖様を敬い大切に作る温もりの心が伺われます。